

信行要文 ③

第九回 法華講夏期講習会 第三期

皆さん、おはようございます。

本年度の法華講夏期講習会も、今回で第三期になりました。

この「信行要文」の講義は、前回、三つ目の『松野殿御返事』の序論的なことを申し上げて、本文の説明には入っておりませんでした。よって本日は、再度『松野殿御返事』の概略について申し上げてから、本文に入りたいと思います。

それでは、テキストの御文を拝読してまいります。

3 松野殿御返事

御文^{ふみ}に云はく、此の経^{たも}を持ち申して後、退転なく十如是・自我偈を読み奉り、題目を唱へ申し候^{ただ}なり。但し聖人の唱へさせ給ふ題目の功德と、我等が唱へ申す題目の功德と、何程^{いかほど}の多少候べきやと云云。更に勝劣あるべからず候。其の故は、愚者の持ちたる金^{こがね}も智者の持ちたる金も、愚者の燃せる火も智者の燃せる火も、其の差別なきなり。但し此の経の心に背きて唱へば、其の差別有るべきなり。（御書一〇四六頁一行目）

この『松野殿御返事』は建治二（一二七六）年十二月、大聖人様が五十五歳の時に、身延から松野六郎左衛門入道に与えられた御書であります。この御書のなかに十四誹謗について説かれておりますので、別称として『十四誹謗抄』とも呼ばれている御書であります。

松野六郎左衛門入道という方は、日蓮大聖人御在世当時の御信徒であります。^{するがのくに}駿河国^{いはら}庵原郡の松野（現在の静岡県富士市）の人であります。庵原郡という名称は、現在はありません。

現在、市町村合併等によって郡名、村名などが、だんだんとなくなってきました。総本山のある住所は現在、静岡県富士宮市上条二〇五七番地なのですが、昔は静岡県富士郡上野村上条二〇五七番地と言っておりました。

『上野殿御返事』という御書がありますが、この上野殿とは南条時光殿のことを言います。昔は地名にちなんで、そのように呼んだのであります。

現在でもそのような言い回しはあります。おじさんが日暮^{にっぽり}里辺りに住んでいると「日暮里のおじさん」、北海道に住んでいると「北海道のおじさん」と、このように地名で呼ぶことがありますね。現在、上野村はありませんが、この「上野」という名称は残っております。例えば「上野小学校」や「上野中学校」といった形で名称が残っておりますけれども、地名としてはなくなりましたので、だんだんと忘れ去られていってしまうことと思ひ、少し残念な気がいたします。

さて、松野殿が住んでいた具体的な場所はどの辺か、はっきりとは判らないのですが、富士川の下流辺りではないかと言われております。この方は、娘さんが南条兵衛七郎殿に嫁いだ縁によって、大聖人様に帰依したのでありますが、その二人の間にお生まれになったのが南条時光殿であります。また、松野殿の次男は六老僧の一人である蓮華阿闍梨日持であります。

大聖人様に対しましては、たくさん御供養をなさっており、その御返事として多くの御書を頂戴しております。

ただいま拝読した御書は建治二年に、大聖人様が身延に入られてからの御述作であり、松野殿が題目の功德の勝劣・有無を質問したのに対してお答えになった御書であります。

初めに、身延の山中にいらっしゃる大聖人様に対し、たびたび御供養をされている松野殿の信心を愛でられ、お褒めあそばされております。また、大聖人様の門下となったために所領を奪われた実相寺の日源の活躍を、たいへん喜ばれております。

さらに今、拝読した御書中にもありますように、「大聖人様の唱える題目と、我らの唱える題目とには、その功德に差別があるのか」という問いに対しまして、「勝劣はないけれども、この経の心に背いて唱えれば、その差別、勝劣はある」と仰せになっているのであります。

そして、そのあとに十四誹謗について触れられて、

「此の十四誹謗は在家出家に亘るべし」(御書 一〇四六^{ワタ})

と訓戒されております。これは十四誹謗の罪は僧侶だからといって免ぜられるものではない、という非常に厳しい御指南であります。さらにまた、法華経法師品の経文を挙げられまして、法華経を持つ者を毀ることを強く誠められています。

そして、そのあとに雪山童子の例を引いて、身命を捨てて仏道を求めるように指導され、最後に、余念なく題目を唱えて随力弘通をしていくなれば、成仏は疑いないと仰せであります。

以上が、概略であります。

それでは本文に入ります。

まず「御文に云はく、此の経を持ち申して後、退転なく十如是・自我偈を読み奉り、題目を唱へ申し候なり。但し聖人の唱へさせ給ふ題目の功德と、我等が唱へ申す題目の功德と、何程の多少候べきやと云云」とありますが、初めの「御文に云はく」というのは、松野殿から大聖人様へのお手紙を指します。すなわち松野殿からの手紙のなかで「此の経」すなわち法華経を受持してから、退転することなく「十如是・自我偈を読み奉り」、十如是とはここでは方便品のことであります。それから自我偈というのは寿量品を指します。ですから、方便品と寿量品を読誦し、題目を唱えていますけれども、聖人の唱えられる題目の功德と、我々が唱える題目の功德とでは、どれほどの相違があるのでしょうか、と尋ねていらっしゃるのであります。

このお尋ねに対して、次に「更に勝劣あるべからず候。其の故は、愚者の持ちたる金も智者の持ちたる金も、愚者の燃せる火も智者の燃せる火も、其の差別なきなり。但し此の経の心に背きて唱へば、其の差別有るべきなり」と答えていらっしゃるのです。

つまり、聖人の唱える題目の功德と凡夫の唱える題目の功德とには、勝劣はない。そ

れは愚者の持っている金も、智者が持っている金も、愚者が灯した火も、智者が灯した火も、そこに差別はないように、唱題の功德にも勝劣はないと仰せです。

ただし、この経の心に背いて唱えるならば勝劣はある、というところが肝心なのであります。

では、この経の心に背くとはいったい、どういうことでしょうか。これは、要するに御仏意に背くことでもあります。

これについて、日寛上人の『当家三衣抄』に、

「南無本門寿量の肝心（中略）末法下種の主師親、大慈大悲、南無日蓮大聖人師（中略）事の一念三千、無作本有、南無本門戒壇の大本尊。南無本門弘通の大導師、末法万年の総貫首、開山・付法・南無日興上人師。南無一閻浮提の座主、伝法・日目上人師。嫡々付法歴代の諸師。此くの如き三宝を一心に之れを念じて、唯当に南無妙法蓮華経と称え、乃ち一子を過ごすべし云云」（六卷抄 二二五頁）

という御指南があります。これは、唱題における御観念についての御指南でありますけれども、この法華経本門文底下種三宝を念じて題目を唱え奉ることが信仰の基本なのです。

もし、池田創価学会のように『ニセ本尊』を作って下種三宝を破壊し、宗祖大聖人、第二祖日興上人以来の唯授一人の血脈を否定して血脈正統の教えを蔑ろにし、また血脈付法の歴代上人を蔑ろにすることは、まさしくこの法華経の心に背く所業であり、大謗法であります。

その上、彼らは日蓮正宗の僧俗に対し、悪口雑言、あらゆる捏造、中傷を行っております。そういった池田創価学会は、まさに「此の経の心」すなわち御仏意に背いており、いくら彼らが題目を唱えても、成仏得道の題目とはなりません。彼らの唱えるところの題目は、まさに法華経の心に背いておりますから、その所業はことごとく十四誹謗に該当する悪業なのであります。

したがって、このテキストの御文のあとに十四誹謗について述べられ。

「悪の因に十四あり。一に僣慢・二に懈怠・三に計我・四に浅識・五に著欲・六に不解・七に不信・八に颯蹙・九に疑惑・十に誹謗・十一に軽善・十二に憎善・十三に嫉善・十四に恨善なり」と。此の十四誹謗は在家出家に亘るべし、恐るべし恐るべし」（御書 一〇四六頁）

と仰せであります。

この十四誹謗の意味を申し上げますと、初めの僣慢というのは、正法に対しておごり侮ることでもあります。

二番目の懈怠というのは、仏道修行を怠けることでもあります。

三番目の計我は、正法を自己の考えで押し量り、我見に執着することでもあります。池田創価学会の姿を見れば、まさにこの姿であります。

四番目は浅識で、正法を自分の浅はかな知識で判断をして、より深く求めないということでもあります。

五番目の著欲は、欲望に執着して正法を求めようとしなないことでもあります。

それから六番目が不解で、これは正法を理解しようとしなないことでもあります。

その次が不信で、これは正法を信じないということでもあります。

八番目が鬻蹙で、これは正法に対して顔をしかめて非難をすることでもあります。

九番目は疑惑で、これは大聖人様の仏法を疑い惑うことでもあります。

十番目が誹謗で、これは大聖人様の仏法を謗ることでもあります。

十一番目は輕善で、これは正法を信受する者を輕蔑、蔑如することでもあります。

次の憎善の憎は「にくむ」という意味でありますから、正法を信受する者を憎むことです。

十三番目は嫉善であります。「嫉」とは嫉妬の嫉ですから「ねたむ」ということであり、正法を信受する者を嫉むことでもあります。

十四番目が恨善であります。これは正法を信受する者を恨むことでもあります。

これらの法華誹謗を犯した者が受ける罪報について、法華經譬喩品第三では、「常に地獄に処すること 園觀に遊ぶが如く 余の惡道に在ること 己が舍宅の如し」(法華經 一八〇頁)

と説かれています。

「園觀」とは園林と高台のことで、園林とは庭園、高台とは高い御殿という意味です。現在は東京スカイツリーが有名ですが、そういった高樓、見晴らしのよい所を言うのです。そして、謗法を犯した者は園觀に遊び戯れて、そこから出ようとは思わないように、地獄を自分の常の住みかだと思い込んで、地獄から抜け出せないようになってしまう、ということなのです。

また「余の惡道」というのは、地獄界以外の餓鬼界とか畜生界のことですが、それらの苦しみを受けても「己が舍宅」つまり自分の家にいるように思ってしまうと、その惡道のなかでしか生きられない、そこから抜け出せなくなってしまうということです。

謗法を犯すと、そのようになってしまうのです。悪にどっぷり染まってしまうと、そこで居心地がよくなってしまふのです。そして、そこから出ようとしなないのです。

創価学会の人達も、そうではないですか。創価学会にいて、これだけ大聖人様の仏法に違背しているにもかかわらず、彼らは謗法にどっぷり浸かっているから、そこから抜け出そうとしなないのです。だから、こういう人達を、私達が本当に心を込めて折伏していかなければならないのです。

彼らは謗法だと知りもせず、そこが心地よいと思ってしまうのです。つまり、まさにこの經文のように、惡道のなかでしか生きられない、そういう境界になってしまふということなのです。

『十法界明因果抄』には、

「法華經に云はく『若し人信ぜずして此の經を毀謗せば○常に地獄に処すること園觀に遊ぶが如く、余の惡道に在ること己が舍宅の如し』文。慳貪・偷盜等の罪に依って餓鬼道に墮することは世人知り易し。慳貪等無き諸の善人も謗法に依り亦謗法の人に親近し自然に其の義を信ずるに依って餓鬼道に墮することは、智者に非ざれば之を知らず。能く能く恐るべきか」(御書 二〇八頁)

と仰せであります。ここにある「慳貪」というのは欲張りのこと、「偷盜」とは他人の物を盗む犯罪のことです。人の物を盗んだりすれば、その罪は重く、餓鬼道に墮ちてしま

うことは、世の人々も知っています。しかし、こういった罪を犯さなくても、謗法によって餓鬼道に墮ちることを知らなければならない、それほど謗法は罪が重いということをおっしゃっているのです。

ここには「慳貪等無き諸の善人も謗法に依り亦謗法の人に親近し」ともおっしゃっております。つまり、謗法の人と詐り親しむということも、よくないのです。ですから、私達の周りに謗法の者がいたら、その人に必ず下種折伏をしなければなりません。それをだまっていて、親しくするというのは、間違った在り方です。謗法の人達が不幸に陥っている原因は邪義邪宗の害毒にあるのですから、本当に親しい人がいたら、その人に必ず下種折伏しなければだめなのです。それが本当の慈悲なのです。詐り親しむだけではいけません。

なかには、^{きよわ}気弱になってしまっ「この信心の話をしてしまうと、今まで築いてきた関係が壊れてしまっ、どうもいづらくなっしまったり、心地よくなっしまっ」というように、変な遠慮をしまっ人がいるかも知れませぬ。しかし、これはとんでもないことで、全く逆なのです。きちんと常識ある行動をもっ下種し、折伏することが大事であります。

この御書に示されてるように「慳貪等無き」者でも、謗法によって、あるいは「謗法の人に親近し自然に其の義を信ずるに依って餓鬼道に墮すること」があるとおっしゃっていることを、私達はよくよく気をつけていかなければなりません。それほど、謗法というのは罪が重いのであります。

逆に言え、正法はそれほど功德があるのです。そのように相対的に考えれば、我々はこの正法を護持していくことが極めて大切だということが、この御文から解ると思ひます。

このほかに、例えば『聖愚問答抄』には、

「されば二の巻に云はく『若し人信ぜずして此の経を毀謗せば、^{きぼう}則ち一切世間の仏種を断ず』文」(同 三八八頁)

とあります。この「二の巻」とは法華経の第二巻に説かれる譬喩品第三のこと、「此の経」とは法華経のこと、「仏種」とは仏に成る種のことであり、法華経を毀謗、すなわち非難をしたり悪口を言ったりすると、一切世間の仏種を断ずることになるのであります。

そして、右の経文の意義について大聖人様は、

「此の文の意は、若し人此の経の一偈一句をも背かん人は、過去・現在・未来三世十方の仏を殺さん罪と定む」(同頁)

とお示しです。つまり謗法を犯すということは「三世」すなわち過去・現在・未来にわたって、また「十方」すなわち東・西・南・北と北東・北西・南東・南西の八つの方角に、上と下を足した十の方向、要するに周りのすべての仏を殺す罪と同じだとおっしゃっているのです。まさに謗法、恐るべしです。この謗法の人間が世間にはゴロゴロしているのだから、これを破折しなければ、自分自身の罪障も消滅できないし、自分自身の幸せも絶対に^{つか}掴むことができないのです。

だから、詐り親しんではいけないのです。例えば、皆さん方にも隣近所の人や親友と言える人がいるでしょう。また、本当にお世話になっ方もいるでしょう。そういう人

に対してこそ、本当に私達が下種折伏して差し上げなければ、これは詐り親しむことになってしまうのです。それはどういうことかという、結局は「三世十方の仏を殺さん罪」と同じだと、このようにおっしゃっているのです。まさに謗法、恐るべしであります。

それから『生死一大事血脈抄』には、

「謗法不信の者は『^{そくだんいっさいせけんぶつしゆ}即断一切世間仏種』とて、仏に成るべき種子を断絶するが故に、生死一大事の血脈之無きなり」(同 五一四)

と仰せです。「謗法不信の者」は生死一大事の血脈がないぞ、とおっしゃっているのであり、これでは成仏はできません。ですから、やはり謗法を破折するという信念、信心を基本に持たなければだめなのです。

あるいは『如説修行抄』には、

「法華經より外の諸經は一分の得益もあるまじきを、末代の学者、何れも如来の説教なれば皆得道あるべしと思ひて、或は真言、或は念仏、或は禪宗・三論・法相・俱舍・成実・律等の諸宗諸經を取り取りに信ずるなり。是くの如き人をば『若人^{にやくにん}不信毀謗此經、即断一切世間仏種、乃至其人命終入阿鼻獄』と定め給へり」(同 六七二)

とあります。要するに、世間の人達は謗法の恐ろしさが解らないから、世間の学者などもみんな、トンチンカンなことばかり言っているのです。

「分け登る^{ふもと} 麓の道は 多けれど 同じ高嶺の 月を見るかな」という歌があります。例えば富士山に登る道はたくさんあって、どの道を登っていても同じ頂上に着くのだから、どこから登ってもよいのだと、このような意味の歌であります。しかし、こと仏教の教え、宗教においては、この譬えは間違っています。

この譬えによれば、結局は「どれも仏様の教えなのだし、同じ頂上を目指すのだから、どの宗派でもかまわないではないか」ということになるのですが、実際には、間違った教えではけっして頂上にたどり着くことはできないのです。しかし、世間の人はこの理屈が解っていないのであり、我々もこのことについては、よく気をつけなければならないのであります。

「どの宗派を信仰しても同じだ」などと言っていると、まさにこの人は謗法の害毒によって一切世間の仏種を断じてしまうことになる。しかも「其^その人命終して 阿鼻獄に入らん」(法華經一七六)と法華經のなかに説かれてあるのですから、やはり我々はよくよく気をつけなければならないのであります。

皆さんも自宅に帰られましたら、これらの御書を、もう一度よく拝読してごらんください。どれほど謗法が恐ろしいか解ります。

今日、日本の国や世界の国々が混沌^{こんどん}としている原因は謗法にあるのです。最近、天変地変^{ちよう}が起きているのも、みんな謗法が原因なのです。このことは大聖人様が『立正安国論』に明言されております。これらの根本的な原因が邪義邪宗の謗法の害毒にあるということをしつかりと認識していかないと、我々自身の信心が立っていかないのであります。また、色々な与同罪を受けることもありますから、このことをよくよく御存念いただきたいと思ひます。

次に『持妙法華問答抄』には、

『若し人信ぜずして此の経を毀謗せば則ち一切世間の仏種を断ぜん。乃至其の人命終して阿鼻獄に入らん』云云。此の文の心は、若し人此の経を信ぜずして此の経にそむかば、則ち一切世間の仏のたねをたつものなり。その人は命をわらば無間地獄に入るべしと説き給へり』(御書 二九四頁)

と、法華経を毀謗すると一切世間の仏に成る種を断じてしまい、しかも、その人が亡くなったのちには阿鼻獄に墮ちると説かれているのであります。

さらに『戒体即身成仏義』には、謗法の「謗」ということについて、とても大事なことが説かれております。すなわち、

「謗と云ふは但口を以て誹り、心を以て謗のみ謗には非ず。法華経流布の国に生まれて、信ぜず行ぜざるも即ち謗なり」(同 一〇頁)

と仰せです。ここにある「法華経流布の国に生まれて」というのは日本のことです。つまり、この日本の国に生まれて、大聖人様の仏法を信じない者、あるいは行じない者は、これも既に謗法だとおっしゃっているのです。

皆さん方は謗法というと、何か悪いことをするのが謗法だと思っているかも知れませんが、大聖人様の御教示はそうではないのです。法華経流布の国である日本に生まれていながら、大聖人様の仏法を信じないことも謗法であり、行じないことも謗法になるのだとおっしゃっているのです。ですから、もしそのような人を見掛けたら、我々は声を掛けなければいけない。大聖人様の仏法に帰依して「一緒にお題目を唱えていこう」と、しっかりと呼び掛けていかなければだめです。そうでなければ、みんな謗法になってしまいます。

お帰りになりましたら、またこの御文をよく読み、しっかりと心に刻んで、いよいよ折伏に励んでいただきたいと思います。

次に、四番目の『松野殿御返事』であります。

4 松野殿御返事

在家の御身は、但余念なく南無妙法蓮華経と御唱へありて、僧をも供養し給ふが肝心にて候なり。それも経文の如くならば随力演説も有るべきか。世の中ものうからん時も今生の苦さへかなしし。況してや来世の苦をやと思し食しても南無妙法蓮華経と唱へ、悦ばしからん時も今生の悦びは夢の中の夢、靈山浄土の悦びこそ実の悦びなれと思し食し合はせて又南無妙法蓮華経と唱へ、退転なく修行して最後臨終の時を待って御覧ぜよ。妙覚の山に走り登りて四方をきつと見るならば、あら面白や法界寂光土にして瑠璃を以て地とし、金の繩を以て八つの道を界へり。天より四種の花ふり、虚空に音楽聞こえて、諸仏菩薩は常樂我浄の風にそよめき、娯樂快樂し給ふぞや。我等も其の数に列なりて遊戯し楽しむべき事はや近づけり。信心弱くしてはかゝる目出たき所に行くべからず、行くべからず。(御書一〇五一頁一三行目)

これは、前の御書と同じ『松野殿御返事』の最後の一節であり、『松野殿御返事』の締め括りに当たり、大聖人様は在家の身としての心の在り方を御教示あそばされていると

ころであります。

初めに「在家の御身は、但余念なく南無妙法蓮華經と御唱へありて、僧をも供養し給ふが肝心にて候なり。それも經文の如くならば随力演説も有るべきか」と仰せであります。在家の身として、ただ信心ひとすじに余念なく南無妙法蓮華經と唱え、僧に対しても御供養することが肝心である。それも、經文のとおりであるならば、随力演説をもすべきである、との仰せであります。つまり、ここでは自行と化他の信心を奨励されているのであります。

ここに「經文の如く」とありますけれども、これは法華經の隨喜功德品の文を指します。すなわち、

「如来の滅後に、若し比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷及び余の智者、若しは長、若しは幼、是の經を聞いて、隨喜し已って、法會より出でて余處に至らん。若しは僧坊に在り、若しは空閑の地、若しは城邑巷陌、聚落田里にして、其の所聞の如く、父母宗親、善友知識の為に、力に随つて演説せん。是の諸人等は、聞き已って隨喜して、復行いて轉教せん。余の人聞き已って、亦隨喜して轉教せん。是の如く展轉して、第五十に至らん」(法華經 四六四)

という經文で、有名な「五十展轉」について述べられているところでもあります。

この内容を述べますと、

「仏様が入滅されたあと、お坊さん、尼さん、また在家の男性、在家の女性および、その他の智者、もしくは年長の者、もしくは幼き者が、この經を聞いて隨喜、つまり心から有り難く感じて喜びます。そして、その法會から出て、ほかの場所に至ります。例えば、僧侶が住む所や人里離れた林、もしくは城、あるいは都市、人の集まる所、または田んぼのあるような里において、彼らが法會にて法を聞いて歡喜したように、父母や親族や善友、知人等のために、それぞれの力に随つて法を説く。そして、その多くの人々が、それを聞き終わって隨喜し、その人々が他の人に教えを伝え、それを聞いた人も聞き終わって隨喜し、その教えを別の人に伝える。そのようにして五十番目に至るだろう」

ということでもあります。

簡単に言うと、初めに法を聞いた人が色々な所に行つて法を説く。そしてまた、その法を聞いた人が、また次の人に伝えていく。そうして五十番目の人にまで展轉していくという意味であります。

ただし、その五十番目の人は、法を聞いて自ら隨喜しただけで、まだ、だれにも伝えていないのです。つまり、自行のみにして、いまだ化他行はしていないけれども、それでも隨喜の功德は廣大であると説かれています。そして、まだ化他行のない五十番目の人の大きな功德をもって、ましてや一番目の自行化他の人の功德がいかに廣大であるかということを示されているのであります。

やはり、末法の題目は自行化他にわたるのでありますから、我々の修行は常に自行化他ということをしつかりと心得ていかなければならないのであります。

この五十展轉について『御義口伝』に、

「五とは妙法の五字なり、十とは十界の衆生なり展轉とは一念三千なり (中略) 五十

人とは一切衆生の事なり」(御書 一八一—一〇)

とお述べになっております。つまり「五十人」というのは、なにも特定の人に限られるのではなく、妙法を聞いて随喜する一切衆生を指すと仰せになっているのであります。

ですから、この御文は、法を聞いて妙法を信受した人が、今度は他の人に伝え、折伏をする。文字どおり展転して、法を聞いた歓喜を、その人その人の力に応じて他に伝え、さらに伝え聞いて説くことの大切さをお示しになっているのであります。

そして、法を聞いた一人ひとりが歓喜に燃えて、随喜演説とか随力弘通という言葉もありますように、あくまでも自分の得た功德の喜びを化他行として、多くの人に向けて弘通していくように勧められているのであります。これはまさに『諸法実相抄』に、

「力あらば一文一句なりともかたらせ給ふべし」(同 六六八—)

と仰せの如くであります。

今、宗門は僧俗一致の姿をもって大折伏戦を展開しております。おかげさまで、去年は九十九パーセントの支部が誓願を達成いたしました。そこで今度は、我々が折伏した人をしっかりと育てていかなければなりません。

五十展転は、折伏された人が他の人を折伏していく、その功德について説いているのであり、今、私達もそうあるべきです。私達が折伏し、その折伏された人が、今度は自分で折伏をする。あたかも五十展転の御文のように、折伏された人が、他の人を折伏するという動きをしていかなければなりません。

いつも言うことではありますが、修行には自行と化他行という二つがあります。折伏はもちろん化他行ですが、育成すること、つまり人を育てて、その方が折伏できるようにすることも大事な化他行なのです。だから折伏だけして、そのまま放っておいたのでは、これは化他行の一方が欠けてしまうこととなり、完全な化他行とは言えません。

折伏した人を育てる、育成するということは大事です。そのことをしっかりと行うことによって、本当に力のある講中に必ずなっていくます。しかし、育成をおろそかにすると、講中がだめになってしまうのです。

折伏はしたけれども、勤行も教えない、御講に来ることも教えない、御登山することも教えない、どうなってしまおうでしょう。それまでの下種折伏が全く無になってしまいます。せっかく縁あって救われた人が、また遠ざかってしまいますよ。もしも、そうなったならば、それは折伏をした人の罪です。ですから、我々は育成ということをし、しっかりと心掛けていかなければだめなのです。自行化他にわたる題目を唱えていくなかでは、一人ひとりがそのことを、しっかりと見直していただきたいと思ひます。

だれかを折伏した。その折伏された人がまた折伏し、五十人目に至る。その五十人目の人の功德は、まだ法を聞いただけで化他行がないけれども、それでも功德があるという意味は、自行化他の信心を實踐する人の功德が、いかに大きいかということを示しているのです。このことをよく知って、育成ということについても、しっかりと決意をして取り組んでいただきたいと思ひます。

これは個人としてだけでなく、講中としても、全体的に取り組んでいかなければなりません。平成二十七年に、名簿上は法華講員が五十パーセント増えた。また、三十三年には八十万人体勢ができた。できたけれども、その実態が伴わないのではいけません。

やはり、それでは御本尊様に対して申しわけなく、本当の御報恩謝徳にはならないのです。このことを、しっかりと考えていただきたいと思います。

端的に言えば、折伏した人がマンツーマンで、しっかりと教えることです。もちろん組織でやることも大事ですが、一番手っ取り早いのは、自分が折伏したら、その人が一人前になるまで、そして折伏ができるまで面倒を見ることです。これが一番、人間関係上においてもやりやすいのです。もちろん、講中としても全体としても取り組んでいくべき問題ですが、一番手っ取り早い方法とすれば、そうするのが良いと思います。

そして、このことを一人ひとりがしっかりと行っていけば、講中全体の意識も、きちんと育成に向かっていくようになると、私は思います。ですから、このことを皆さん方も御承知いただきたいと思います。

この『松野殿御返事』の御文は、法を聞いた人が他の人に伝え、文字どおり展転して人から人へと伝える。そして、その歓喜をもって喜び合っていくことが大切だということです。また、その延長線上にあるのが広宣流布であります。そのためには、まさに「力あれば一文一句なりともかたらせ給ふべし」ということを心掛けていくべきだと思います。

次に「世の中ものうからん時憂も今生こんじょうの苦くさへかなしし。況してや来世まの苦をおぼめとめ思し食しても南無妙法蓮華經りょうぜんと唱へ、悦よろこばしからん時まも今生こんじょうの悦めびは夢の中の夢、靈山浄土りょうぜんの悦めびこそ実まことの悦めびなれと思し食し合はせて又南無妙法蓮華經と唱へ、退転なく修行して最後臨終の時を待って御覽ぜよ」とあります。

ここにある「世の中ものうからん時」というのは、世の中が憂鬱ゆううつになってしまう時です。そのように、今生の苦しみでさえ悲しいことなのだから、まして来世の苦しみにおいてはなおさらだと思って、南無妙法蓮華經を唱えていきなさいということです。

ほかの御書に、

「苦樂ともに思ひ合はせて、南無妙法蓮華經とうち唱となへ居みさせ給へ」(同 九九一)という御文もありますが、苦しい時も楽しい時も南無妙法蓮華經と唱えていくことが解決のための一番の道、最善の方法なのです。だから本当に困った時、苦しい時、うれしい時、楽しい時、常に南無妙法蓮華經と唱えていきなさいというのが大聖人様の御金言の意味であります。このように、どんな時も、きちんとお題目を唱えていくことが大事なのです。

そして「今生の喜びは夢のなかの夢のようなものであって、靈山浄土の喜びこそが、まことの喜びである。このように思い合わせて南無妙法蓮華經と唱え、信心修行に励んでいきなさい。そして、最後臨終の時を待って御覽なさい」とおっしゃっているのです。

「臨終の一念は多年ぎょうくの行功よに依る」(富要 三・二五九)という御指南もありますように、臨終をいかに迎えるかということを考えてならば、常に南無妙法蓮華經をしっかりと唱えていくことが大切なのであります。

ここに「靈山浄土の悦び」とありますけれども、この「靈山」というのは釈尊が法華經を説かれた靈鷲山のことで、靈山浄土とは仏のまします国土、いわゆる常寂光土を指しております。この御文の意からは、今世に対して来世の意味で仰せられておりますけれども、大聖人様は『御義口伝』に、

「靈山とは御本尊並びに今日蓮等の類南無妙法蓮華經と唱へ奉る者の住処を説くなり』
(御書 一七七〇〜)

と、靈山浄土とは南無妙法蓮華經を唱える者の住処を指すのだとおっしゃっているのです。ですから、皆さん方が南無妙法蓮華經と唱えるその場、その所が靈山浄土なのであり、靈山浄土を他に求めてはいけません。ここに求め、自分に求める、これが信心なのです。

これと正反対の考えを持っているのが、阿弥陀經の教えです。「世の中は苦しく、汚い。だから、穢土と嫌われる娑婆世界を捨てて、西方十万億土に行って幸せになりましょう。あちらに往生すればいいですよ」という教えです。

このような教えがありますか。今世において何も解決できない教えなど、もう宗教ではありません。今、生きている人の悩み、今世の悩みを解決していくのが宗教でしょう。それを「ここはだめだから、あちらへ行こう」などと莫迦なことを言っているから、阿弥陀經はだめなのです。

皆さん方は絶対に、そのようなことではいけません。どんなに苦しい時も、今、自分が題目を唱えている所が靈山浄土だと思って、頑張るのです。そうすれば必ず、道は開けてきます。しかし、そこから逃げ出してしまえば、阿弥陀經と同じで、逃げて、逃げて、逃げまくって、結局どこに行ってしまうのかというと、地獄へ行くのです。これではだめです。信心ではなくなってしまう。

本当の信心というのは、苦楽共に南無妙法蓮華經と唱えて、楽しい時も苦しい時も乗り越えていき、その場を浄土と化していくのが大聖人様の仏法なのです。娑婆即寂光という言葉の意味はそこにあるのですから、このことをしっかりと心得ていただきたいと思えます。

このように娑婆即寂光、さらに依正不二の原理によって、いかなる環境、いかなる国土世間であってもまさに仏様のまします常寂光土と化することができるのです。だから、今生において一心に信心に励んで南無妙法蓮華經と唱え奉る時、

「三世各別あるべからず」(同 六六七〜)

と仰せであります。

すなわち、たとえ来世といえども、今世の連続であります。つまり来世の果は、今世の因によって決まるわけでありますから、今世において至心に信心に励む人の成仏は、おのずと保証されるということであります。

このように「今世がだめだから来世に行こう。来世に行ったら幸せになれる」などということはありません。今は来世の因を積んでいるのですから、しっかりと題目を唱えていけば大丈夫です。そのようにして、未来に向けて成仏の境界を築いていくことが大切であります。

こういったことを一人ひとりがしっかりと銘記して、まさに現時において、生きている今こそ信心修行に精を出していく、今こそ境界を開いていこうと励んでいくことが大切です。それには苦しい時も、あるいは逆に楽しい時も、しっかりと題目を唱えていかなければならないということであります。

次に「妙覺の山に走り登りて四方をきつと見るならば、あら面白や法界寂光土にして

瑠璃^{るり}を以て地とし、金^{こがね}の繩^{なわ}を以て八つの道^{さか}を界^{そら}へり。天より四種^{こくう}の花^{けらく}ふり、虚空^{こくう}に音楽^{おんがく}聞こえて、諸仏菩薩^{しよぶつぼさつ}は常樂我淨^{じやうらくがじやう}の風^{かぜ}にそよめき、娛樂快樂^{げらく}し給^{たま}ふぞや。我等^{われら}も其の数^{つら}に列^{つら}なりて遊戯^{ゆげ}し楽しむべき事はや近づ^めけり。信心弱くしてはかゝる目出たき所^めに行くべからず、行くべからず」とありますが、「妙覺の山」というのは悟りの山、つまり成仏の境界を指します。すなわち、この御文は南無妙法蓮華經と唱え、退転なく修行して最後臨終を迎え、成仏の境界に至った時の様相について述べられているのであります。

初めに、妙覺の山に登り、四方をきくと見ると、法界は寂光土であるとおっしゃっております。「法界」というのは、簡単に言えば因果に支配された世界という意味で、この私達の住む世界のことです。すなわち、周りの世界は常寂光土、仏のまします国土にして、七宝の一つである「瑠璃」を敷き詰めたような地面がある。さらに「金の繩を以て八つの道を界へり」とありますが、「八つの道」とは正見・正思惟・正語・正業・正命・正精進・正念・正定^{じやうぢやう}という八正道のことです。すなわち正しい見解、正しい決意、正しい言葉、正しい行為、正しい生活、正しい努力、正しい思念、正しい瞑想^{めいそう}のことを八正道と言ひ、これを「金の繩」で区切られているということです。

そして「天より四種の花ふり」とは、法華經のなかに「此土の六瑞」という、法華經が説かれる時に此の土に現れる六つの瑞相があるのですが、そのうちの一つの、天から四種の蓮華が降るといふ相のことです。

「四種の花」というのは、一つは曼陀羅華^{まんだらけ}つまり白蓮華^{びやく}が降るといふことです。次は摩訶曼陀羅華^{まか}で、摩訶^まというの「大」といふ意味でありますから、大白蓮華^{まか}が降ってくるということです。次が曼殊沙華^{まんじゆしゃけ}で、これは紅蓮華^ぐのことです。それから最後が摩訶曼殊沙華^{まか}で、これは大紅蓮華^{まか}のことです。

これらの花が降ってきて、虚空からは音楽が聞こえ、諸仏、諸菩薩は常樂我淨の風にそよめいている。この「常樂我淨」といふのは、仏の境地や大乘の涅槃に具わる四つの徳を示しているのですが、常住不変の常、安樂で苦を離れた樂、自分で差し障りとなるものない我、迷いがなく無垢清淨なる淨の四つの徳で、これはまさに、なんの心配もなく、安樂な生活を送れるといふ意味であります。

その常樂我淨の風にそよめき、「娛樂快樂」すなわち気持ちよく快適に過ごすことができる。そして松野殿等の「我等」も「其の数に列なりて遊戯し」つまり心に任せて自在に振る舞って「楽しむ」ことは間近である。ただし、信心が弱くしては「かゝる目出たき所」に行くことはできないと、ここでも信心が強調されているのであります。

このように、妙覺の山に登って四方をきくと見ると、本当にすばらしい世界が広がっているのですが、臨終正念を迎えてそこに行くためには、信心が弱くしては「かゝる目出たき所」すなわち寂光土に行くことはできない、との仰せであります。

まさに、この御文を拝するとき「信心弱くしてはかゝる目出たき所に行くべからず」といふ御訓戒を、よく心得なければなりません。我々の成仏得道といふことは、信心の厚薄によるといふことを改めて知るべきであります。

大聖人様は『日女御前御返事』のなかに、

「此の御本尊も只信心の二字にをさまれり。以信得入とは是なり。日蓮が弟子檀那等『正直捨方便』『不受余經一偈』と無二に信ずる故^因によて、此の御本尊の宝塔の中へ

入るべきなり。たのもしたのもし。如何にも後生をたしなみ給ふべし、たしなみ給ふべし。穴賢。南無妙法蓮華經とばかり唱へて仏になるべき事尤も大切なり。信心の厚薄によるべきなり。仏法の根本は信を以て源とす。されば止観の四に云はく『仏法は海の如し、唯信のみ能く入る』と。弘決の四に云はく『仏法は海の如し、唯信のみ能く入るとは、孔丘の言尚信を首と為す、況んや仏法の深理をや』（同一三八八頁）

と仰せになっております。

「以信得入」とは「信を以て入ることを得」ということでありますが、信をもって初めて成仏することができるという意味であります。これは法華經譬喩品で、智慧第一と言われた舍利弗すら信心によって成仏したことを挙げて、ただ信のみが仏道修行の要諦であるとおっしゃっているのではありません。

つまり、一切衆生はことごとく信をもって成仏することができるのであり、さらに言えば、大聖人様の弟子檀那は正直捨方便、不受余經一偈と無二に信ずることによって御本尊の宝塔の中に入る、すなわち成仏の境界に入ることができるということで、これはすべて、成仏・不成仏は信心の厚薄によるとの仰せなのであります。

また「仏法は海の如し、唯信のみ能く入る」というのは、海は非常に大きいから、その海にはどこからでも入れるだろうと思うけれども、仏法の海にはただ一つ、信心という入り口しかない、とおっしゃっているのです。

ですから、頭でっかちに色々な宗教を勉強したり、大聖人様の仏法を勉強したりするのはだめで、やはり信ずることが大事なのです。「仏法は海の如し」と仰せになり、これほど広大無辺な仏法でも入り口はただ一つ、信しかないぞと仰せになっていることを、皆さん方もよく心掛けていただきたいと思います。

それから「孔丘の言尚信を首と為す」とありますけれども、この「孔丘」とは孔子のことです。孔子の教え、つまり儒教ですが、この孔子の教えでさえも、信ずることを第一としていることを指しているのではありません。すなわち、孔子は仁義・道徳・教養ということを重ねておりますけれども、その孔子の説く教えのなかにも、信ということの大切さが説かれていることをおっしゃっているのではありません。

この『日女御前御返事』のなかには、さらに、

「外典に云はく『漢王臣の説を信ぜしかば河上の波忽ちに氷り、李広父の讐なりと思ひしかば草中の石羽を飲む』と云へり。所詮天台・妙楽の積分明に信を以て本とせり。彼の漢王も疑はずして大臣のこぼを信ぜしかば立つ波凍ほりて行くぞかし。石に矢のたつ、是又父のかたきと思ひし信の故なり。何に況んや仏法においてをや」（同一三八九頁）

と仰せであります。

ここにある「漢王」とは、後漢朝の創始者である光武帝のことを指します。光武帝がまだ一武将の時、戦いに敗れ、敵に追われて逃げる途中に大きな河にぶつかってしまいます。そこで家臣のなかで最も信頼をしていた王覇という者を遣わして偵察をさせたのです。河は舟がなければ渡れない状態だったのですが、王覇は真実を言うのが忍びなく、光武帝に対して「河は凍っているので渡ることができます」と報告したのです。すると

光武帝はこれを信じ、前進して河へ行ったところ、河がたちまちに凍ったという話であります。

それから「李広父の讐なりと思ひしかば」というのは、李広は前漢時代の将軍でありまして、虎に殺された父の^{かたき}仇を討つために獵に出ていったのです。そして、虎を見つけて矢を放ち、その矢が突き刺さったのですが、そばに行ってみると、実は、それは虎ではなく岩だったという話です。「一念岩をも通す」という言葉は、ここから来ているのです。

信念を持って行こうならば、固い岩にも矢が通ることです。河が凍るということも、信念を持って行ったことです。信の不思議さ、力強さということが、これによって解るのです。まして、私達が信じ奉る大御本尊は、^{くどくじゆ}功德聚と申します。^{あつま}功德の聚りですから、一心に題目を唱えていくところに、必ず所願が成就していくのであります。

成仏も不成仏も、願いがかなうも、かなわぬも、これは結局、我々の信の一念にあるということ、私達はよくよく知るべきであります。河が凍ったという話、一念岩をも通すという話、これら感応の話は、いずれも信ということの大切さを教えてくださっているのであります。

まさに、成仏の鍵、要諦は信であるということを知るべきであります。法華経のなかには「以信得入（信を以て入ることを得）」という言葉があるのですから、我々は常に、これを忘れないことが大切であると思ひます。

それでは、五番目の御文に入ります。

5 本尊供養御書

法華経の文字は六万九千三百八十四字、一々の文字は我等が目には黒き文字と見え候へども仏の御眼には一々に皆御仏なり。譬へば金粟王と申せし国王は沙を金となし、^{しやくまなん}釈摩男と申せし人は石を珠と成し給ふ。玉泉に入りぬる木は^{るり}瑠璃と成る。大海に入りぬる水は皆^{しおほゆ}鹹し。^{しゆみせん}須弥山に近づく鳥は^{こんじき}金色となるなり。^{あかだやく}阿伽陀薬は毒を^{かぶら}薬となす。法華経の不思議も又是くの如し。凡夫を仏に成し給ふ。^{かぶら}蕪は鶉となり山の芋はうなぎとなる。世間の不思議以て是くの如し。^{いかい}何に況んや法華経の御力をや。(御書一〇五四^じ二行目)

この『本尊供養御書』は、建治二（一二七六）年十二月、大聖人様が五十五歳の時に、身延から南条平七郎殿に与えられた御書であります。

内容は、南条平七郎殿が御本尊への御供養として、お米と芋を大聖人様に奉ったことに対しての謝辞が述べられ、「法華経の文字は一字一字が仏であって、凡夫をも仏にする不思議な力がある。また、この法華経を受持する人は八寒地獄にも八熱地獄にも^{おか}侵されない。煩惱の火にも焼けず、生死の海にも漂われないところの、成仏の境界になれる」と説かれているのであります。

初めに「法華経の文字は六万九千三百八十四字、一々の文字は我等が目には黒き文字と見え候へども仏の御眼には一々に皆御仏なり」とありますが、これは法華経の一字一

字が、ことごとく仏様であるということでもあります。

『一生成仏抄』のなかに、

「夫無始の生死を留めて、此の度決定して無上菩提を証せんと思はゞ、すべからく衆生本有の妙理を觀ずべし。衆生本有の妙理とは妙法蓮華經是なり。故に妙法蓮華經と唱へたてまつれば、衆生本有の妙理を觀ずるにてあるなり。文理真正の經王なれば文字即実相なり、実相即妙法なり」（御書 四五〇）

という御指南があります。ここでも、一々の文字は仏様の目から見れば皆、仏だとおっしゃっており、これと同じ意味であります。

ここにある「衆生本有の妙理」というのは、一切衆生の命のなかに本然的に具わる理であり、衆生の本性、いわゆる法性のことです。法性というのは、言葉を換えて言えば仏性ということです。ですから、衆生は本来、仏性を持っているということになります。

すなわち、無始以来の生死流転の苦しみを留めて、このたび無上菩提を証得しようと思うならば、すべからく衆生本有の妙理、すなわち我々自身の仏性を觀ずることである。その衆生本有の妙理、つまり仏性とは何かといえは妙法蓮華經のことである。だから、南無妙法蓮華經と唱え奉れば、その衆生本有の妙理、いわゆる仏性を觀ずることになるのである、と仰せられているのであります。

また「文理真正の經王なれば文字即実相なり、実相即妙法なり」とおっしゃっていますが、「文理真正の經王」とは説かれた文も理も真実で、故に諸經の王であるという意味であり、すなわち法華經のことです。その法華經は、まさに諸經のなかの王様と言うべきお経であり、そこに説かれる文も、そしてそこに説かれる理も、いずれも最も勝れ、最も上にあることを指しているのであります。

「文字即実相」というのは、法華經の文字はそのまま仏の悟りである実相、すなわち実なる相、ありのままの姿、不変の真理であるということをおっしゃっているのです。ですから、実相には法性とか真如、実性等の意味がありまして、教法の所詮の理を指しています。

これについて『諸法実相抄』のなかに、

「実相と云ふは妙法蓮華經の異名なり」（同 六六五）

と、「実相即妙法」なることをお示しになっております。諸法実相の実相というのは妙法蓮華經のことです。ですから、妙法蓮華經の文字は単なる文字ではなくして、我々凡夫の目には「黒き文字」としか見えませんが、仏様の目から見れば妙法蓮華經であり、いわゆる文字即実相、一つひとつの文字が仏であると仰せられているのであります。

では、テキストの御文に戻ります。

「譬へば金粟王と申せし国王は沙を金となし」とありますが、金粟王という人は北インドの人で、二世紀半ばの人であります。この方は、古代王朝のクシャーナ朝の第三世で、この王朝最大の王と言われた人であり、阿育大王と並んで仏教の保護者として知られております。

この方は、初めは拝火教という、火を神格化した宗教を信じて、仏教を排斥しておりましたが、のちに馬鳴菩薩を知って仏教に皈依したのであります。そして第四回

の仏典の結集けつじゅうの時にも大塔を建立するなど、仏教の弘通に力を尽くし、あのガンダーラ（パキスタン北西部のペシャーワル地方の古名）文化は、この王様の時に最も盛んであったと言われております。

この金粟王は、砂を金にしたと仰せであります。

次に「釈摩男しゃくまなんと申せし人は石を珠たまと成し給ふ」というのは、詳しくは解らないのでありますが、釈尊の成道の時に初めて教化を受けた五人の比丘がおり、そのなかの一人ではないかと言われております。優れた神通力の所有者であったと言われておりますが、この釈摩男が石を宝珠ほうしゆに変えたと言われております。

そして「玉泉に入りぬる木は瑠璃るりと成る。大海に入りぬる水は皆鹹しおほゆし」との御文のうちの「玉泉」というのは、清らかな泉という意味であります。その清らかな泉、あるいは特定の泉を指しているのかも知れませんが、その玉泉に入ると、木が宝石になってしまうというのです。そしてまた、大海に入った水が塩辛くなるということは、皆さんも御存じのことでしょう。

さらに「須弥山しゆみせんに近づく鳥は金色こんじきとなるなり」とあるなかの「須弥山」は御存じの通り、古代インドの世界観で、世界の中心にあるとされる山であります。妙高とか安明などと訳されますけれども、この須弥山に近づく鳥は金色となるとおっしゃっております。

また「阿伽陀薬あかだやくは毒を薬となす」とある「阿伽陀薬」は、どんな病も治すと言われる霊薬であります。この薬は、まさに不老不死の薬であって、毒を薬にするとされ、これは涅槃経などにも説かれています。

次の「法華経の不思議も又是くの如し。凡夫を仏に成し給ふ」との御文は、先に挙げた金粟王、釈摩男、玉泉、大海、須弥山、阿伽陀薬による物事の変化の例をもって、一切衆生を成仏せしめる法華経すなわち妙法蓮華経の広大無辺なる功德、御本尊の偉大なる仏力・法力を示されているのであります。

そして「蕪かぶらは鶉うずらとなり山の芋いもはうなぎとなる。世間の不思議以て是くの如し。何に況んや法華経の御力をや」とあります。

こういった例自体は、実際にはありえないこともありますけれども、当時はこうしたことが伝えられ、信じられていたのです。そこで物事が大きく変化する可能性を持っていることの例として、これらを挙げられ、法華経の偉大なる功德をお示しあそばされているのであります。

ですから、このように「山の芋がウナギになってしまう」というのですけれども、その当時は、そう信じていたのです。ですから、これを一例として引かれ、「世間の不思議」ですらこのようであるから、まして法華経のお力、功德はまことに偉大であり、まさに不可能を可能にするということなのです。

なぜ、このようなことを言うのかといいますと、我々の過去世における様々な罪障を、この信心、この御本尊の功德によって必ず消滅できるのです。ただし、そのことを言ってもなかなか解ってもらえませんが、大聖人様は色々な譬えをお引きになられ、そこから御本尊様には広大無辺なる功德があることを示されているのです。

『大白法』などを見ますと、本当にすごい体験が載っております。そのような体験談を読みますと、病気が治った話、境界を変えた話、不幸を幸福に変えていった話など、

その実例がたくさん出ています。

実際に、現実にもそういうことが起こるのです。これが御本尊の功德なのです。この御本尊の功德はどこから導き出されるかということ、結局は我々の信心の厚薄によるのであります。信心が決定^{けつじょう}しているか、決定していないかによるのです。

では、その決定すべき信心とは何かということ、当然ながら自行化他にわたる信心のことです。これは、大聖人様の御金言のなかに、はっきりと示されております。だから勤行、唱題をし、折伏をして育成をしていく、これをしっかりと行っていけば、必ず私達は幸せになれるのです。不可能が可能になるのです。

皆さん方は、このことを絶対に信じて、無疑日信^{むつじしん}の信に立ってお題目を唱えてごらんなさい。そしてまた、折伏をしていってごらんなさい。必ず、そのようになります。私達はこのことを、信心の上でしっかりと決定していかなければなりません。

特に、今、皆さん方は僧俗一致して平成二十七年の誓願達成、なかんずく本年度の誓願達成に向けて御精進されていることと思います。そうしたなかで、一人でも多くの人を救っていくという大きな慈悲の心を持って精進していくとともに、我々一人ひとりが異体同心をしていくことが大切であります。

今回、この講習会に参加された方々は、御自分の支部に帰られましたら、昨日の講師の方々から聞いたお話、あるいは私の話も含めてその内容を支部の方々にお伝えいただいて、みんなで本年度の誓願達成を誓っていただきたいと思います。

幸い、本年は去年よりも少し良いペースで折伏成果が進んでいます。しかし、安心をしてはだめです。「そうか、それならば少し手を抜こう」などというのはいけません。ウサギとカメの競争の話と同じように、安心して油断してしまうと、必ず負けてしまいます。そうではなくして、一人ひとりが奮起して、これからも本年度の誓願達成へ向けて御精進いただきたいということを心からお願いしまして、本日の話を終了いたします。